

サモンナイト5 路地裏の暗闇

クレド先生

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※2014年6月26日 大幅改稿。

この男こそ、セイヴアールの裏の顔を見抜く者。

治安が良いとされる境界都市セイヴアールにも、少なからず殺人や麻薬と言った残酷な面がある。

召喚士達の活躍の裏で、警察騎士団は日々この脅威と対峙し戦っていた。

しかしある狂った男が騎士団に、路地裏に、物語に姿を見せた事により、全ての運命が狂い始める。

彼はこの街の闇を暴く警察騎士であり、狂った正義を持つ者だった。

果たして、この物語の結末やいかに？

目次

FILE. 00

1.	A n i m u s B o x	1
2.	素顔(前編)	22

FILE. 00
1. Animus Box

怪物と闘う者は、その過程で自らが怪物と化さぬように心せよ。
おまえが深淵を覗くならば、深淵もまた等しくおまえを見返すのだ。

—『善悪の彼岸』 146節より フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチエ

その部屋の中は、極めて静寂そのものであった。

年月が経ち過ぎて半ば橙色に変色してしまった一つのランプだけが狭い室内を照らし、数羽の小さな蛾が粉を吐きながらコン、コンと灯をつついていた。

張りぼての窓ガラスの向こう側は日が暮れて紺色になった夜の闇に覆われており、その真下にあるゴミと鼠の死体が散乱する路地裏から流れ込む冷気が、したたかに窓の骨を揺さぶっていく。

その僅かな息吹を受けて、床に転がった無数の毛埃が虫の様に跳び上がり、宙を舞って落ちていった。

部屋はこれらの音と、時折揺れてゴミを動かしている床のボロ新聞紙の擦れる音が鳴る程度であった。

雨が降れば、窓を開けたすぐ上にある壊れた樋から落ちる水滴が、その錆びきった窓枠に当たる音がよく聞こえるだろう。

例え雨が降らなくとも、湿った埃と腐敗したゴミの臭気が嫌になる程に漂うだろう。

だが今日部屋を支配していたのは、嗚咽にも聞こえるくぐもった呻き声と血の臭気であった。

普段は誰もいない筈であるこの部屋の中心に、一人の男が椅子に縛り付けられていたのである。

男は30代前半程の顔であったが、若禿と無精髭が目立つ容姿に、雑巾の如く汚れた血糊付きのシャツとズボン、そして布による目隠しと猿ぐつわをされている為かぐつたりと沈んでおり、実年齢より遙かに上の齢に見える。

男の顔には無数の大小様々な青痣と切り傷があり、骨ごと左に折れ曲がった鼻からは生温い血が流れ、右の鼻たぶは赤みの強いピンク色の肉が見えるほどに抉られていた。

口もまた然りである。上の前歯は全て無くなっており、唇の一部や歯茎はゴムの様に耄りとられ、黒く変色した血と肉の欠片が垂れ下がっている。

肩から鎖骨にかけて骨が砕け折れているのか、男の右肩は奇妙な形のまま動かない。

椅子の背もたれに回され後ろ手に縛られた両手の指数本は爪が剥がされ、幾許かの肉の毛が不揃いに立っており、骨もまた完全に折れている為、親指などは白い骨が露出していた。

男は裸足であった。足の下にある箱には無数の鋭いガラス片がどれも上を向いて散乱しており、男は力なくその場に足を下ろしている。

既にガラスの山は紅色に染まっていた。男の猿ぐつわと目隠しもまた、同様であった。

その時だった。不意に部屋の扉が開き、固いブーツの靴音が室内に響いた。

靴音は男の目の前で止まると、男が裏返った声で呻きだし、やや嘔吐を混ぜながら悲鳴を上げる。

男はこの靴音をよく知っていた。靴音の主が自分をここまで惨めで痛ましい置物にした人物である事を、彼はよく知っていたのだ。

男は、このセイヴァールでも中の下に及ぶ程度の異能の戦闘能力を持っている。

しかし彼は普通の人間である筈のこの愛外の人物と真っ向から戦い、30秒もせずに敗北したのである。

固定されていない頭を振りながら、男は必死の抵抗をした。

しかしその足掻きは、不意にこめかみに襲いかかった鈍痛によつて
いとも容易く止められてしまう。

そして男は自分の目隠しと猿ぐつわが外されていく感覚に戸惑い
ながら、周囲を見渡した。

オレンジ色に彩られた視界は、全てがぼやけきっていた。

その時男が幸運だった事は何も見えない状況から解放された安堵
と混乱に身を任せた為に、右側の視界がもう闇しか映せなくなった現
実に気付かず済んだことであった。

男は必死に周囲を見回しながら、助けを呼ぼうと叫び声を上げんと
口を開ける。

しかしその瞬間、男の顔色は絶望に変わった。

声が出ないのだ。幾ら力を入れようと、掠れた空気の音しか返って
こないのである。

彼はすっかり緊張した為に忘れていたのだ——既に喉が潰さ
れ、半ば裏返った小さい声しか出せなくなっている事を。

「——42番街ブロード・チャイルド、89番街イーサン・ネイ
ヴァー、91番街エイミー・トッドウエル。

三人とも名の知れた違法薬物の売人で、昨日の午前二時に何者かに
殺害された。

お前は調停召喚士の職権を利用し、この三人が娼婦や色狂いのクズ
共に薬を流していた事実を隠蔽していた——警備料金と称して
週毎に金を受け取っていたな。

この三人の最近の動向を知っているな？」

その時であった。ランプの光の外側——目の前の暗闇から、声
が投げかけられたのである。

この低い声は静かに話していた。その音色は恐ろしく冷徹であり、
まるで感情の無いおぞましいものであった。

未だ朦朧とする意識の中でその声に恐怖した男は、逃げる様に視線
を右に動かした。

すると右の床には、小さな狐型の幻獣——男の響友だった者が、

屍となって転がっていた。

その頭は爆弾がさく裂したように凄まじく裂かれており、酸化して黒くなった夥しい量の血だまりの上にその中身がぶちまけられている。

赤黒い脳の肉片や、ゲル状の部分が潰れて醜い液体と化した目玉が音も立てずに鎮座している様は、普通の人間が見れば嘔吐してしまうだろう程に悲惨な光景であった。

前足は引きちぎられ、肉の紐が垂れ下がる断面からは蛆の張った白い骨が見えていた。

恐怖からの逃げ場をなくした男は、呻いた後に咽びながら急いで話し出した。

「わかったよ、話す、話すから……」

俺は確かに金を受け取った。けどアイツらとトラブルは起こしてない……

そこはわきまえてた。寧ろ最近羽振りが良かったんだ。報酬の額も増えてたんだよ。

バーで言ってた。奴ら、真紅の鎖から流し込んだ最新のヤクをばらまいてたんだ……」

「それはいつ、どこでの話だ？」

「ああ、クソ……十日前だ。」

たしかターミナルストリートの外れのバーで……畜生、いてえ！
もういいだろ!? 全部話したんだ、助けてくれよお！」

男が力を振り絞って叫ぶが、返ってくるのはペンが紙か何かの上を滑る音だけであった。

しかし影の中に居る誰かはその時だけ、先程までとは違う行動に出た。

男の目の前——ランプの光の中に姿を現したのだ。

しかしその手に握る物を見て、男の顔は再び絶望の淵へと立たされた物のそれと化していく。

影から出てきた人物が右手に持っていたのは、そこらの廃墟にならばよく捨てられているサバイバルナイフだった。

しかしその形は錆びきった廃棄物にもかかわらずナイフ元来の姿のまま、その白刃も先端も恐ろしい程に良く尖っていたのだ。

影から出てきたその人物は、まるで最初からそんな物など無かったかのように平然と幻獣の死骸から出た脳髓を踏みつぶし、男の右側へとゆっくり歩み寄る。

そしてグチャリと音を立てる脚をピタリと止めると、その人物は一瞬の内に、その固いブーツの靴底で男の足を踏みつけた。

この刹那に自分が何をされたのかがまるでわかっていなかった男は、踏みつけられた足が無数の鋭いガラス片を砕き、ピツと赤い飛沫を上げたその瞬間になって、掠れきった声で叫んだ。

必死にもがいて足をガラス入りの箱から離そうと力を入れるが、踏みつけている脚は退くどころか微動だにせず、寧ろその力を強めて男の足ごとガラスの山を踏み潰している。

影から出た人物は、先程と全く変わらぬ声で静かに、しかしはつきりと言葉を発した。

「イーサン・ネイヴァーは耳と顔を削がれ顔を火で炙られゴミと共に捨てられた。

真実を吐かないならば貴様も同じ末路を往く事になる」

「嘘はない、ないんだ！ 畜生いてえ、助けて！

ああクソ……クソ、わかった！ 五日前に会いに来たんだ、ネイヴァーが！

助けてくれてって言った。ヤバイ客にヤクを売ったから匿ってくれって！

俺は……断ったんだ。小遣い稼ぎが目的だった。なのに何でこんな……」

その時だった。男は目の前の人影がナイフを持ち上げている事に気付いた。

男は慌てて首を振って脱出を試みるが、金具でがちりと固定されている椅子は揺れを受けても微動だにしない。

男はよだれを垂らしながら慌てて人影に向き直り、乾いた声でまくしたてた。

「おい、待て……待ってくれよ。全部話したろ!？」

もう見逃してくれよ! あんたの事は外に漏らさない、約束するからよお!

だから助けてく——」

男が言い切らない内に。ナイフが降り上げられた。

彼が最後に見たのは、ナイフの切っ先とそれを握る黒い革手袋。

そして胸元に白と黒と真紅によって彩られた、叫喚する髑髏の紋章入りのロングコートだった。

—午前11時06分 セイヴオール 中央最高裁判所 第89号

法廷

「第1級謀殺について、判決は?」

「我々陪審員一同は、被告人ジェラルド・シーニーズを有罪とします」陪審員代表が書簡を読み上げると同時に、法廷はどよめきに包まれた。

驚いた様子で隣の見ず知らずの人間と会話する傍聴者、慌ただしく指示を出しメモを取る報道陣、被告人の親戚達の嗚咽。

間も無く打ち鳴らされたガベルの固い音と、閉廷を告げる裁判長の声とをぼんやりと聞きながら、アベルトは入口の脇の壁に寄りかかったまま、被告人の背中を見つめていた。

興奮冷めやらぬと言った様相のままざわめく傍聴席を背に、二人の廷吏に両脇を抑えられた被告人が連行されていく。その背は、心なしか開廷前に見かけたそれと同じように酷く小さく見えた。

ドアの脇に立つ廷吏が扉を開け、傍聴者達に外へ出るよう呼び掛ける。

腕組みをしたままそれを一瞥し、その無数の靴音や話し声を何処か遠くに感じながら、アベルトは何気なく法廷の天井を見上げた。

そのまま、去年見たジェラルド・シーニーズの背中を思い出そうとして、その後ろ姿に掛る霧を回想していた。

「——騎士アベルト、どうなさいました？」

廷吏に名指しで呼ばれ、ふと我に返ったアベルトは、自分たち以外誰もいなくなつた法廷を見回した。

どうやら閉廷から少し時間が経っていたらしい。人混みが消えた事にすら気付かないほど深く考え込むなど、あまり自分らしくないと考えながら背を壁から離し、廷吏に軽く返事をして法廷を出る。

穏やかな晴れた昼前だと言うのに、裁判所は喧騒に包まれていた。

別件の殺人事件の公判準備や報道陣の取材の嵐、傍聴席に詰めかける人々—— 普段なら鬱陶しがるだろうそのどれもが、今のアベルトにとってはまるでどうでもいいものに見えてしまう。

ふと、左手の腕時計に目をやった。今日は久々のまともな非番だったが、特に用事の宛ても無い。

黒い短針がもうすぐ十二時を指そうとしているのを見て、アベルトは自分が朝食を取るのを忘れていた事に気付いた。

——午前11時26分 セイヴアール 繁華街 喫茶店『コンフェツ ション』

屋外テラスの席に腰を下ろし、アベルトは賑わう路地の方をぼんやりと眺めていた。

此処のテラス席はほぼ満席で、小さな子を連れた親もちらほら見える。アベルトは通勤の際にこの店の前を通るが、これほど繁盛しているとは思ひもしなかった。

先程注文を受けた女性店員が、奥の厨房に注文の内容を伝え、表の勧誘を務める店員に何か言われている姿がチラリと映る。それもまた新たに入店した女性客二人の笑顔に隠れていく。

平和だ。漠然とだが、アベルトはこの時間を何処か懐かしがっている自分が居る事に気付いた。

今まで働き続きの毎日を走っていたせい、今日の時間は酷く緩緩としたものに感ぜられる。

たまには書類の山や事件とにらみ合いをせずに、こんな風にゆったりと無駄な時間を過ごしておく時間が必要かもしれない。

ただでさえ最近では物騒な事件が立て続けに起きている。

ターミナルストリートで発見された、三人の違法薬物密売人の惨殺体。犯罪シンジケート同士の抗争の激化、マクス埠頭に入港する異世界商船襲撃の噂……

何の気なしにそんな事に考えを巡らせていると、先程注文した二枚のエッグトーストとコーヒーが女性店員の持つトレイに運ばれてやってきた。

アベルトが礼を言ってそれを受け取ると、その店員は少々申し訳なさそうな表情で、おずおずと尋ねた。

「お客様、当店は現在満席です……」

大変申し訳ありませんが、相席でも宜しいでしょうか？」

「ええ、大丈夫ですよ」

店員が深々と頭を下げたのを見て、アベルトは優しく笑いかけて気にしない様に言った。

元々喫茶店に一人で居る事で得られる落ち着きは、今のアベルトにとってはどうでもいいことだった。

食欲もそうありはしない。ただ此処で何となく時間を潰せばいいと思っていたのだ。

朝から飲まず食わずで裁判の傍聴にかかっていた為、アベルトはとりあえず乾いた口と喉を潤わせようとコーヒーカップを手を取った。

「……あら、アベルト？」

その時、背後から凜々しく響いた女性の声で名前を呼ばれ、アベルトは思わずカップを口から離して振り返った。

赤と黒を基調とした警察騎士団の制服を纏い、そこに立っていたの

は、イエンファであった。

「奇偶ね。貴方、今日は非番じゃなかったの？」

注文を取り終えたイエンファは、小さなそよ風に髪を揺らしながら、人で賑わう路地に立ち並ぶ店を一瞥した。

正直な所、アベルトはこの女性をよく知らない。

数日前の魔精タケシーの群れによる列車強盗事件で初めて顔を合わせて共に捜査を行い、先日まで続いていたらしい住民の急激な物忘れに関する事件について、幾つか質問された程度だ。

彼女の肩書きが警察騎士団本隊の精鋭部隊「櫻花隊」に所属する特務騎士である事も知ってはいたが、それもつい最近まで眉唾もの都市伝説扱いされていた噂程しか知らないのである。

しかし悪い人間ではない事はよく理解していた。そうでなければこの数日間アルカ達の職務についている説明が付かない上に、彼女は列車強盗事件の際に住民に危害を加えたタケシーの一団に確かに怒りを抱き、逃げ惑う人々を守ろうとしていた姿勢が見えたからだ。

コーヒーを啜っていた口をカップの縁から放し、アベルトは小さく片眉を上げた。

「非番さ。朝出かけたついでに、この店で昼飯を済ませてんだ。

……アンタこそ、アルカとペリエについてなくていいのか？」

「今は、ね。流石に二十四時間彼女達に付く訳にはいかないもの。

それに、私もあなたと同じような理由よ。出掛けたついでに此処に寄っただけ」

「そうか」

自分らしくない素っ気ない口調に、アベルトは内心酷く驚いていた。

しかしそれを知ってから知らずか、イエンファは口調や声はいつも通り凜としたもののまま、アベルトを見据えて言葉を続ける。

「……何かあったの？」

「……いや、何もないさ」

「貴方と付き合いが長い訳ではないけれど、貴方の雰囲気が少し異常なのはわかるわ。」

それに、朝食もとらないで何かを考え込むのは、身体に悪いわよ」その言葉に、アベルトは微かに目を見開いてイエンファの視線を見つめ返した。

テーブルを挟んだ二人の間に小さな静寂が生まれ、木製の椅子が僅かに軋む音が静穏を攫う。

路上販売の店から子供達の穏やかな笑い声が響き、アベルトははつと我に返る。

それから少し間を置いて、彼は手に持ったカップを静かにコースターの上に置いた。

「お見通し、って訳か？」

「いいえ。悪いけれど、カマをかけただけよ。」

……でも、それ以上の事が理由だって言うのは、分かる」

店員が運んできたアイスコーヒーを受け取り、イエンファはそれを可愛らしい模様のストローでぐるりとかき混ぜる。

氷がカラン、と爽やかな音を立てて囁き、コップの表面に結露した滴が陽光を跳ね返した。

アベルトは苦笑して小さく肩を竦めると、溜息を吐いたままコーヒークップの水面を見つめた。

「……サニタス取締役銃撃事件、ってのは覚えてるか？」

「ええ、確か今日判決が……」

そこで何かを理解したように、イエンファが口を噤んだ。察しが付いたのだろう。

アベルトは黒い水面に浮かぶ自分の顔を見つめながら、言葉を続けた。

事件の始まりは、五か月前のある日の昼下がりに遡る。

警察騎士団セイヴァール本局に、70番街の路上で銃撃があったという通報が殺到した。

「背の高い男が誰かを拳銃で撃った」——それぞれの詳細は

多少違えど、要点は一致していた。

当時付近を巡回していた警察騎士団員二名が本局からの無線を受けて現場へと向かうと、そこには胸に三つの赤い大穴が空いている横たわったスーツの男性と、弾切れになった拳銃を握り締め、酷く粗い呼吸をし、体を激しく痙攣させて呻いているジェラルド・シーニーズの姿があった。

当然ながらジェラルド・シーニーズはその場で逮捕されたが、ジェラルドは意外な事に全く抵抗をしなかったらしい。

その後初動捜査隊と鑑識班が現場検証を開始し、現場から二発の357マグナム弾と六個の薬莖を発見している。また、その場で発砲されたと思われる残りの四発は、被害者の肋骨、心臓部、右肺等からひしゃげた姿で見つかっていた。

どちらも逮捕時にジェラルドが所持していた回転式拳銃の線条痕と一致しており、銃のグリップからはジェラルドの指紋が、ジェラルドの右手からは大量の硝煙反応が確認されていた。

銃の製造番号から販売元を調査した結果、銃の購入者もジェラルド自身であることが判明し、最早彼が犯人であることは火を見るよりも明らかだった。

この事について、騎士団上層部は比較的早い段階での記者会見に踏み切っていた。

それは何も早期の事件解決を成し遂げたからというだけではない。被害者の身元が問題だったのだ。

スーツを着た男性——もといオスカー・エイブルは、セイヴァール中の企業の大手スポンサーを務める、大製薬企業の社長だった。

路上で平凡な男性に撃ち殺された哀れな被害者が、経営規模で言えばセイヴァールでも五本の指に入る大手製薬企業「サニタス」の、それも代表取締役を務めていたとなれば、マスコミが注目を寄せるのも当然であるからだ。

問題はこれだけの人物が殺害された事に注目が行き、騎士団本局の捜査が「遅れている」と民衆に思わせない事だった。

現在警察騎士団では人員不足が深刻になりつつあり、休暇を返上して勤務に励む騎士は多い。

それが原因で、手抜き捜査や公的機関としての労働基準無視等のあらぬ不正のうわさが流れては、警察騎士団への人員募集に深く関わる事態になってしまう。

新たな騎士を必要とする上層部としては、そんな事態だけはどうしても避けたかったのだ。

事実記者会見場は満席となり、局長に対する記者陣からの質問は長い間途切れる事が無かった。

その中で、当時丁度別の殺人事件の解決を迎えていたアベルトは、まだオスカー殺害の「容疑者」として拘束されていたジエラルドの取り調べを任命されたのだ。

その時の事を、アベルトははつきりと覚えている。

太った弁護士横の横に座っていたからだろうか、酷くやつれて痩せ細った様に見えるジエラルドは、窪んだ眼光で虚ろな視線を机に向けていた。

銃器不法所持のネタで供述を取ろうと身構えたアベルトに対し、ジエラルドはアベルトを牽制しようとか何かを言いかけた弁護士を抑えて、ぽつりぽつりと喋り出した。

曰く、ジエラルドは娘ジェニーが6歳の時に妻を病で亡くし、それから五年間男手一つで娘を養い続けた。

しかし三年前の春、ジェニーは小児がんを患い、肺に悪性肉腫が転移していたことが判明した。

それから半年の間、「サニタス」が製造・販売を執り行う抗がん剤を使用しつつ治療を行っていたが、娘の容体が回復する事は無く、間もなくして死亡。余命宣告より二年も早い最期だった。

その後ジエラルドは、娘の速過ぎる死の原因はサニタスが販売していたあの抗がん剤にあるのではない、独自に調査を開始したと言

う。

探偵を雇って製薬から販売までの形態をくまなく洗い、娘の遺体を調べた結果、あの抗がん剤には微量ながら悪性腫瘍の成長や転移を促

す成分が含まれている事が判明した。

一か月前、彼はそれを元手にサニタス製薬部を起訴したが、裁判所側は十分な証拠ではないとして起訴を棄却。

そして怒りを堪え切れなくなった彼は護身用銃器販売店から購入した小型の拳銃を使用し、オスカー・エイブルが出先で一人になる瞬間を待つて襲撃したのだ。

この事件について、裁判所と陪審員は極めて冷徹な態度を取った。弁護側の主張が全てジェラルド自身から得た情報と言う事や、犯行当時明確な殺意があり不特定多数の人間を危険に晒す行為をした事もあり、彼への厳刑——終身刑はゆるぎない物となった。

その後サニタスは次期社長任命までの間、副社長及び専務による経営の続行を表明。

一時暴落しかけた株価は上昇傾向となるまでに持ち直し、問題となった抗がん剤はいつの間にかカタログから姿を消していた。

「俺達は、警察騎士団だろ？」

事のあらましを話し終えたアベルトは、長い溜息を吐いて椅子の背凭れに体を委ねた。

その急な問いにイエンプアが黙ったまま訝しそうな表情で彼を見るが、それに構わず続ける。

「俺達は正義を掲げて、皆を、平和を守るために力を持つてる。」

確かにジェラルド・シーニーズがした事は重罪だけどさ」

コーヒーカップの水面が揺れる。生まれた小さな波紋が、鏡写しのアベルトの顔を歪ませ、臃な輪郭へと変えた。

「あの男が人を撃つ前に阻止して、牢屋で余生を送らせない……」

それが出来て初めて正義って言えんじゃねえかって、思えて来るんだ」

霧がかったあの背中が、再びアベルトの回想に割り込んでくる。

小さく、そして全てを失った様にぽっかりとした、一人の男の背中。

その背中に手を触れて後押しをすべき時がいつだったかは、永遠に分からないだろうとアベルトは思えた。そしてそれが出来なかつた自分が、警察騎士団が、本当に正義であるのかもまた、疑問に思えた。

「私達は秩序を守る番人で、警察騎士団よ。」

誰にも平等であり続けねばならないし、そして振り返ってはならない時もある」

虚ろなアベルトの視線を叩き斬る様に、凜としたイエンプアの声が飛んだ。

「私達は、私達の思う正義で動いてはならないの。」

それがどれくらい良い結果を残せたとしても、それは秩序を乱すから……」

そこで一つ区切ると、イエンプアはそれまでの冷たく厳しい声色とは違う、微かに穏やかな笑気を含んだ声で、言った。

「でも、貴方の考えは正しいと思うわ。それに——」

——私はそういう考え方、嫌いじゃないわよ？

そう小さく呟きながら、平静のままアイスコーヒーストローに口を付けるイエンプアを、アベルトは少しの間呆然と見つめていた。

しかし間もなくして小さく笑い、カップを手にとってコーヒを啜る。

口の中でほんおりとした熱と、独特の苦みが緩やかに広がった。

白雲をたなびかせる青空が燦々と太陽を輝かせ、全てを照らし出さんとしている様を肌で感じる。

カップを置いた時のアベルトの顔は、頭上に広がる青空に似た明るさが燈っていた。

「あんがとな……少し楽になった」

その言葉を受けたイエンプアは、一瞬だけアベルトを見つめ、それからふと微笑みを零した。

そして彼女が再びストローに口を付け、程良く冷えたアイスコーヒを飲むとする。

その時だった。

何かが弾け飛ぶような、乾いた音が繁華街に鳴り響き、アベルトと

イエンプアが表情を凍りつかせる。

男女入り混じった短い悲鳴が何処からか聞こえ、先程の住民達の澆刺とした笑い声と活気は斬り取られた様に消え失せていた。誰の足音も聞こえない、奇妙な静穏が生まれていく。

誰もが顔の何処に怯えた表情を覗かせて、家々に反響するその不気味な音を、見えもしないのに目で追おうとする。

それよりも早く、アベルトとイエンプアは勘定をテーブルに置いたまま駆け出した。

二人は経験と仕事柄、その音の正体を熟知していた。普通の人間なら、何処からともなく来た奇怪な音だと結論付けて済ますだけのこの音は、彼らにとって最悪のケース——死傷者が出るかもしれない、悪魔の方向にも聞こえたのだ。

銃声。それも、その近くに居るだろう人々の悲鳴を伴った、惨劇の予兆。

二人のその研ぎ澄まされた感覚により鍛えられた耳は、普通ならば反響でぼやけてしまう銃声の出所だけではなく、この通りの二つ向こう側——繁華街中心部の西方面エリアから響く、銃声と同じ場所から来るだろう怒号と悲鳴を感知していた。

走れば現場まで一分とない。アベルトはその俊足を駆使しながら、非番時の非常事態対応様に腰に差していた投擲具——鴉烏の柄に手をかける。

横を見れば、イエンプアもまた腰のホルスターに納めた中折れ式の二連拳銃——MTD—41Sのグリップに手をやり、携帯無線で本部へ連絡を入れていた。

走る為に出してしまう域に合わせて、風に負けない声で叫ぶ。

「イエンプア、道はわかるな!?!」

「ええ! 47丁目ね!」

「よし、裏から回ってくれ! 俺は表の方から気を引いて注意を逸らす!」

了解、と叫んでイエンプアがフェンスを軽やかに飛び越えて散解し

ていく姿を見送りながら、アベルトはいつの間にか眼前まで迫っていた逃げ惑う人混みに巻き込まれる。

誰もが悲鳴を上げ、我先にと逃げ場を求めて無我夢中で走る中をくぐり抜け、アベルトは最後の一人とすれ違い、曲がり角へと行き着いた。

見ると、数メートル先の家具店の中から、数人が這い出る様に逃げる姿がある。

舌打ちをしまいと強く堪えながら、その中の一人である腕に怪我を負ったらしい男性の肩を捉えた。

「怪我の具合は!?!」

「だ、大丈夫だ、掠っただけだよ。アイツら、小さい銃で撃ってきやがって!」

アイツら、という言葉に眉を顰めて、アベルトは男性の両肩を軽く叩いて落ち着かせる。

「店内に何人居る?」

「た、確か二人だ。どっちも黒づくめで、一人が小さい拳銃みたいなものを持ってた……」

突然、う、撃って来やがったんだ!」

「よし、いいか。此処から向う数ブロック先から警察騎士が来る筈だ。

そいつらに事情を説明して怪我を診てもらうんだ、いいな!?!」

両肩を強く押さえられたまま、痙攣した様に頷く男性を見て、アベルトは手を離れた。

そして男性が無事に現場から脱出する後ろ姿を尻目に、店を挟んで反対側の道から、拳銃を構えたまま身を顰めるイエンファアに、待機する様にハンドサインを送る。

イエンファアが頷いたと同時に、アベルトは一気に店の入り口の脇まで駆け込んだ。——その直前だった。

「——ッ、な」

アベルトが驚愕すると同時に、次の合図を待っていたイエンファアもまた目を見開いて店の入り口を見ていた。

当然である。明らかな銃声が響いた店内に向かって、悠然と、そし

て堂々と歩いて入っていく男の姿があつたのだから。

男の足取りは全く平静そのもので、危険地帯へと踏み込んでいく人間のそれとは到底思えない。

あまりの光景に数瞬の間呆気にとられたアベルトとイエンプアは、男を止める事も——いや、男の相貌をよく見ることすらもままならず、そのブーツが響かせる固い靴音を聞いている事しか出来なかつた。

その時二人の瞳に煌いて映った物は、男の右の胸元の紋章——
—黒と白、そして真紅に彩られた喚起する髑髏の紋章だった。

手慣れた、簡単な仕事だ、と髭面の体格の良い男は思った。
繁盛している家具店を襲つて、その売上金を丸ごと奪い取り、早々に身を隠す。

此処の店主は怠慢なのか、それとも何か事情があつたのか——
どちらにせよ、一週間分の売り上げを奥にある部屋のア物の金庫に蓄え、日を迎えたら専用の集金係に売り上げを渡し、銀行へ送る。

最近になって悪化しつつあるセイヴァールの治安状況を考慮すれば、あながち的外れな行動でも無いが、それでも防犯意識が低過ぎる。

だからこそ、安い密造品のデリンジャー——22口径の小型上下二連拳銃だけで、手早く簡単に仕事を済ませられる。

相棒の大男が奥の金庫を特殊工具で破る音を聞きながら、手元のレジを蹴り、貧乏ゆすりをして銃を握る手を意味も無く忙しなくさせる。そろそろ一時間前に摂取した麻薬の効き目が来る頃だった。

その時だった。視界の端に、何者かが此方に歩み寄ってくるのが見えたのだ。

髭面は咄嗟に銃を構え、その乱雑な動きしか出来ず、照準を合わせる為の数秒の静止すら望めないだろう腕を入れてきた人物に向ける。しかし入ってきた客は、仮にも露骨な殺意をもって銃口を向けられているにも関わらず、歩調を緩める事は無かった。

「おおい！ 止まらねえとブーツ殺すぞー！」

タガと言うものが無い、白痴じみた声で髭面が叫んだ。

特殊工具が金庫の錠を破ろうとする音がゆっくりと途絶え、店内に靴音だけが響く。

髭面は薬のせいで微かに揺らぐ視界の中、その人物を三白眼でじろりと睨んだ。

入ってきた客は、冷徹と言う言葉も生温い程の冷たい眼で髭面を見据えていた。

客——男は渋い皺を寄せた、少なくとも40代前半以上はあるだろう顔立ちだった。

優に195cmの背丈と、厚いコートの上からでも判別できる程の凄まじい筋肉を誇る体に着た、黒みの強い紫色のロングトレンチコートを揺らしている。

コートの内には黒無地のワイシャツに暗いワインレッドのネクタイ、そして下半身には紫みのある黒無地のスーツズボンを着いており、黒く強面の相貌をしたブーツが固い音を鳴らす。

両手は黒い薄手の革手袋を着けてポケットに突っ込まれ、胸の真紅と黒、そして白に彩られた鬚の紋章が光る。

黒みの灰色をした短い短髪を微かに揺らし歩み寄る男の顔は、無表情——いや、冷酷その物が宿った様な恐ろしい雰囲気を漂わせ、ブルーの鋭い瞳が髭面を射抜いた。

薬で気分が上がり続けている髭面は、その異様な雰囲気思わず怯みかけ、そして自分を笑った。

男のとの距離は4、5メートルで、こちらは既に銃口を向けている。少し腕に力を込めて引き金を引けば、それで事は済むのだ。怯む必要が何処にある。

「聞こえねえのかあ!? 見らんねえ顔にしてやろうか——」

改めて調子にくれた髭面の怒声が終わるその前に、男は歩きながら傍にあった家具カタログの小山から数冊を手に取り、それを髭面の手元へと投げる。

発生に意識を集中する一瞬の隙を狙ったその動作は、普通の人間でもまず捉えられない素早さで行われた。

回転して固さを増した雑誌が拳銃を握る手を叩くと同時に、反射的にガードをしようとした髭面が手を顔を覆う様に上げる。

その瞬間、残った腕がぐいと凄まじい力で前に引つ張られる。男がこの哀れな強盗の右側まで肉薄し、腕を手で引つ張り上げたのだ。

男は真つ直ぐに伸びた髭面の肘に向かつて、肘の一撃を叩きこんだ。

尋常ではない力で殴り砕かれた髭面の肘が、ボキリと音を立てて逆向きに反る。

銃が取り落とされると同時に骨を折られた張本人の悲鳴が上がりかけるが、立て続けに見舞われた男の拳が髭面の悲鳴を、顔を歪ませ、何本かの歯の欠片が血と共に弾け飛ぶ。

そして掴んでいる右腕を捻り上げながら、男は髭面の膝の裏を蹴つて跪かせ、その後頭部を髪の毛ごと鷲掴みにする。

ほぼ数瞬の出来事に意識が飛びかけていた髭面の、その血まみれの顔が一度上を向き——男は引き上げたこの強盗の顔面を、目の前の木棚の角目掛けて凄まじい力で叩きつけた。

短い呻き声上がり、固い樹木で作られた棚の角に片目ごと顔を叩きつけられた髭面が、血を垂らしながら奇妙な音を発した。だが男は構わず、捻り上げていたこの強盗の右腕を軽い関節で極めながら、二度目、三度目と哀れな強盗の顔を更に強く角に叩きつけた。

「何かましてんだクソ野郎！」

男の背後から怒声上がり、彼が振り向くと同時に背後まで迫っていたのだろう、強盗の片割れである覆面の男が拳を振りかぶる——

——が、それよりも早く男が一步を踏み出し、その前進による凄まじい力を乗せた左腕の払いで拳を制し、同時にこの強盗の喉に右の一撃の喰らわせた。

自身の勢いも相まって気管支が一気に潰れた覆面男は、呼吸が出来ない事も忘れて咽る様に前にのめる。

しかしそれを逃さず、男は下がってきた後頭部を抑えつけてその顔に膝を叩きこみ、先程抑えた腕の関節を極めて肩部ごと外す。

そしてそのまま立て続けに強盗の足を払い、捻り上げた勢いを利用

して床に尻から落とすし、衝撃でふらついている哀れな物取りの顔に、眼球に、容赦なく拳を叩きこむ。

黒い革の手袋が強盗の顔を抉ると同時に、眼球の液体が混じった血が飛沫となつて散った。

そして血を吐いて倒れ伏したその顔を更に蹴り飛ばすと、男は衝撃を逃がすまいと掴んでいた強盗の右腕——と言つてももう動かない肉の塊だが——をへし折った。

ここまでのほんの一分にも満たぬ一幕を終え、男は以前表情を変えぬまま、二人の物言わぬ元強盗犯を見下ろしていた。

あれだけの運動をしたと言うのにもかかわらず呼吸一つ乱さず、そして傷一つないままで、男はコートの襟を整える。

その時、店の入り口から二人分の足音が響いた。

「——動かないで！」

突入と同時にMTD—41Sの銃口をぶれることなく男の背中に合わせ、イエンファアが叫んだのだ。

アベルトもまた同じく、鴉烏をどの刹那にも投擲できる構えのまま突入し、男を見た。

しかし男は背後から明確な殺意と威嚇を向けられて尚、平然とその場に立っている。

アベルトがもう一度勧告し様と口を開いた時、男が懐から何かを取り出した。

銃か、或いは爆発物か——どちらとしても危険にである事に変わりはない。

二人は、流石の素早さで完全な攻撃態勢へと移り、身構えた——が、男の取り出したものを見て、固まった。

赤と黒の紋章——警察騎士団、それも本隊に所属する騎士の証明である勲章だ。

何故、この男が——イエンファアがいぶかしんだ直後、アベルトが同じ疑問を驚愕の色を持って口にした。

「アంత、一体誰だ——!?!」

それを聞いて男は勲章を懐に戻し、二人のほうへと振り返った。

「警察騎士団本隊『特捜班』所属——特別捜査官のリゼルだ」

2. 素顔（前編）

―事件ファイル 98. 4―

リチャード・サイラスは土曜の休日の昼、セイヴァール郊外の公園で遊んでいた9歳の少年ヘンリー・ワイズミューラーとその5歳の弟のアルバート、そして彼らの幼馴染である8歳の少女デイジー・ベルモンドに近付いた。

リチャード・サイラスは三人に自分の飼い犬の行方が分からないから探している、見ていないかと話しかけた。三人は見ていないと答え、自分達も探すと言い出した。その後、彼は三人と共に公園から去り、翌日の早朝に発見姿を消していたという。

事件発生の推定時刻からおよそ四時間後、三人の両親らから通報を受けた警察騎士団少年犯罪対策課は、関係者に事情聴取を行った。しかしそこで当該児童三名を連れた男の目撃証言が多々寄せられたため、初動捜査が行われた。

リチャード・サイラスは宗教を熱心に学ぶ内向的な18歳の青年だったが、幼少期から人目を忍んで小動物の殺害を繰り返す残虐な行為を楽しんでいた。初めは虫を、次に小鳥を、続いて猫や犬といった風に、彼が殺す生物は時間を経るに従って大型のものへと変化していった。

そうして年月を重ねる毎に、その標的は次第に人間へ、そして手近な周囲の人々へと変化していく。

彼が11歳の頃、母親の不倫が原因で彼の両親は離婚している。当時の父親の証言によれば、三行半が付き付けられた日の晩に、母親は彼に対して「こんな子供を生むんじゃない」などと酷く怒鳴り散らし、食器類を投げたり、胸部を殴りつけるといった暴行を一時間にわたって働いたという。

（追記）その後の更なる捜査で、リチャード・サイラスの母親は以前から彼に暴行を働いていた事実が判明した。林家の住人によれば、彼の家には小さなプールがあり、母親は何か気に障る事があれば酒に酔い大声を上げて彼を殴りつけ、プールに蹴り落としていたという。父

親については児童虐待幫助及び通報怠慢の余罪を追及中。

その数日後、夫婦は離婚。リチャード・サイラスの親権は実父の手に渡った。その翌日、彼の母親は自宅の風呂場で溺死した。酒に酔っていたこともあり、警察騎士団による捜査は事故という結論にたどり着いた。なお、母親の死亡推定時刻には彼が家に居た事が判明している。

更に五年後。郊外のある地区の学校に通う児童、セレーナ・デッカードが行方不明になった。セレーナは その三日後、死体となって近くの公園の池で発見された。警察騎士団当局は通報を受けた当初、死因は溺死による不運な事故であると考えていたという。

しかし初動捜査の結果、遺体から胸部に24箇所、刺傷痕が発見された事により、事態は大きく変化する。当然新聞社から事件のあらましについての説明を求める声が殺到し、市民には不安が襲い掛かった。

中には警察騎士団の初動対応について批判する声も確認されている。

捜査によれば、目撃証言は無く、指紋は比較的小さく、断片的なものしか発見されなかった為、捜査は難航の色を呈した。地域に住む性犯罪の前歴がある人物を虱潰しに調査し、事件当時妖しい行動をしていた人物を調べ上げたが、これと言った成果は挙げられなかった。

そして次第に事件に関する報道が風化し、セレーナ・デッカードの死が世間から忘れられて二年後、彼は凶行に至った。

誘拐事件発生から21時間後、河川脇の大通りの78丁目で、子供三人を連れた男が銃を持って河川敷に立っているとの通報が相次ぎ、警察騎士団当局の機動部隊が出動。男はリチャード・サイラスと判明し、自動三名も誘拐被害者であると確認された。

マーレイ警部は待機中の騎士達と共に現場へ急行、近隣住民の避難と共に機動部隊を展開。リチャード・サイラスの位置から道を挟んで反対側の建物に、一班の狙撃部隊を配置した。

彼は児童三名を横一列で地面に座らせ、彼らに銃を向けたままその後ろを歩いていた。彼は警察騎士団の包囲を見てもすぐに児童らを

殺害せずにいた。現場ではその状態が二十分ほど続いている。

その時、後方から人質交渉人がテープで彼の音声録音していた。以下の文章が録音内容の一部である。

リチャード・サイラス

『誰か……に気付いたのか?』

機動隊員

『銃を捨てろ! 捨てるんだ!』

リチャード・サイラス

『誰か僕に気付いたのかって言ってるんだ!』

誰も僕を見てくれなかった、誰もだ! だからあの売女を殺してやったのに!』

この発言からおおよそ一分後まで、リチャード・サイラスはうめき声をあげていたことが確認されている。

そしてさらにその直後、彼は叫んでアルバート・ワイズミュラーの後頭部を銃撃した。

すぐさま建物に待機していた狙撃班が発砲。銃弾はリチャード・サイラスの右肩部を貫通して地面で跳弾し、デイジー・ベルモンドの左大腿部に命中。しかし被弾した際に、彼は所持していた回転式拳銃の引き金を引いてしまい、その銃弾が前方で待機していた騎士一名の左鎖骨に命中。

現場に居た警官隊の内三名の騎士が銃撃を敢行し、計十一回の発砲を行った。その内の一発がリチャード・サイラスの頭部に、三発が彼の左腹部及び下腹部に、内五発が背後の壁に命中した。更に残りの一発はデイジー・ベルモンドの頬を掠り、もう一発はヘンリー・ワイズミュラーの左肩部を貫通した。

その後、無論リチャード・サイラス及びアルバート・ワイズミュラーは死亡し、デイジー・ベルモンドは左大腿部から銃弾を摘出されるも、杖を必要とする歩行を余儀なくされた。ヘンリー・ワイズミュラーは左肩を奇跡的に回復するも精神的鬱状態に陥り、重度の自閉症を患った。

彼らの両親はいずれも弁護士団と共に警察騎士団を告訴したが、半

年後のヘンリー・ワイズミュラーの自殺と裁判費の不足を理由に和解に至っている。

以上が、後のリバー・キラーと呼ばれたりチャード・サイラスの概要である。

—14日 午前7時21分 セイヴアール 警察騎士団本局 2
F デスクルーム

『メイトルパ特区で開発された新製品枕の特許が発行』『誓央連合法薬物に関する新法案の投票を開始』『新型の減音器内蔵拳銃 口レイラル特区で本日射撃試験開始』

机の上の朝刊を尻目に、朝一番のコーヒーを啜って、イエンプアは報告書の束を睨んでいた。

昨日の繁華街の武装強盗事件の詳細は、ごく普通の報告書と何ら変わりないものだ。

「未確認の薬物反応」と「特別捜査官 リゼル」という項目を除いては、

まず二人の薬物中毒者、出所不明の密造拳銃の使用という点から見て、考える。

前者は比較的簡単だ。本人らは事件当時とその前後の記憶が無いと主張しているが、現場に居た目撃者の証言や、突入した自分達が確認した事から、武装強盗を行ったのは自称マッドボールことダニー・クライドとレジー・ドノヴァンで間違いない。

後者の事でまず思いつくのは、最近になってセイヴアールで銃器の密造と密売を行い始めた真紅の鎖だ。

これは、犯罪件数が極めて多い地域で張っている潜入捜査官の情報が裏付けになる。しかし最近では、銃火器や違法薬物の売買と併せて何らかのビジネスを始めているらしい。

銃の仕入れ先も同じである。捜査にあたった警察騎士団員の聞き込みにより、三日前、クライドとドノヴァンは12丁目のバーの裏手

で数人の男と銃や薬の取引をしていた事が確認されている。裏路地で吐いていた客が、たまたま現場を見かけたのが幸いした。

その際、取引の相手はストリートギャングマーク入りの衣服を着た数人の強面の集団で、真紅の鎖の名を口にしたとの事だ。はったりにせよ、本当に真紅の鎖に所属しているにせよ、組織の名前を出している時点でこの取引相手は小物だ。こういった手合いは、近い内に自然と逮捕されるか、間抜けをやらかすものだといエンフアは経験から知っていた。

問題は、検査の結果、ドノヴァンとクライドの尿と血液のサンプルに確認された流動性の薬物である。鑑識の薬物専門班に分析を頼んだところ、この薬剤に含有されている物質は、大麻やマリファナ等の原生植物ではなく、幻覚作用を含む薬剤を調査して人為的に製造されたものだったと判明した。

警察騎士団本隊にこの含有物と一致する成分の違法薬物が無いか照合したところ、これと一致する物は確認できないと返答が返ってきた。つまるところ、この薬物は新種のLSDに近いのである。セイヴァールをはじめとする警察騎士団本局は、まだこの薬物の全貌について把握していない。

現在、セイヴァールではこの薬物を服用した二人と、酷似した発作を訴える住民が数人居る。

彼らを診察した医師の報告書によれば、服用時の効果は旧世代の違法薬物と類似しているようだ。短時間の多幸福感と痛覚等の感覚の軽減の後、軽度の疲労感や幻覚、幻聴等の禁断症状が発症し、次の服用を求め始める。服用回数が多ければ多いほど、多幸福感は短くなり禁断症状の発症が早まる。

しかし重要なはその点ではない。この薬品は旧世代のそれとは違い、正規の医薬商品に類似した錠剤の形状をしており、検閲や大衆の目に止まる事が少なくなったのだ。

現在、麻薬捜査課と組織犯罪捜査課が連携して、取り締まり強化と新型薬物についての広報準備を行っているが、潜伏している常用者はかなり多い筈だ。連携しても早期撲滅は難しい。

そして後者である、『特捜班』所属、特別捜査官リゼルについて。結果から言えば、詳細は全く不明のまま。わかつていることは、この男は先述の強盗犯二人の片割れのクライドの右目を完全に潰し、右腕と鼻骨と歯六本を折りアキレス腱を切りかけたこと、そしてもう片方の強盗犯のドノヴァンの両目をほぼ失明させた上に、右腕と頬骨、鼻骨と左鎖骨に歯四本をへし折り、声帯に重度の障害を残す一撃を与えた事である。

警察騎士団本隊で人事部の幹部補佐を務める友人を頼りに、データベースに登録されている特別捜査官扱いの騎士をリストアップして確認する事は出来た。しかし登録されている情報は「リゼル」という個人名と「本隊特殊捜査班所属 第一級特別捜査官」の肩書きのみで、ほかの情報は一切記載されていないのだ。

顔写真どころか、必要最低限の戸籍情報すら記録されていない。イエンファは特務騎士として長年勤めを果たしている訳ではないが、それでも本隊の階級事情にはある程度明るいつもりだ。だが、今までの経験から言えば、この第一級の特別捜査官の肩書きは見たことが無い。

精々地方局をまたいで的合同捜査で、一時的に派遣される第三級特別捜査官しか知らないのである。

ただし特殊捜査班の噂は違う。眉唾物の話に近いが、櫻花隊で噂を何度か耳にしたことがあった。

やはりそれぞれ詳細な部分に差異はあれど概要は同じで、皆こう話す。

一桁のほんの僅かな人数で構成される捜査班。所属する騎士は皆精神異常者であり、その正体は騎士団の病質者隔離用部隊である、と。

この件について「特務」を扱う上層部に秘密裏に連絡を取ってはみるが、やはり関知していないと一辺倒の返事がやってくる。彼女は内心首を傾げるしかなかった。

何にせよ、このリゼルという男についての情報が少なすぎるのだ。

自分が接触したのは二回だけ。それも前者は呆気にとられていて顔を見ただけで、後者は銃口を向けての会話だった。尤も、警官隊の

応援部隊の突入のどきどきに紛れて、振り向いた時にはすでに彼の姿が消えていたのだが。

何にせよ、今後は自身の特務の障害にならない様に調査を続けていくべきだろう。

イエンプアは書類を錠付の棚にしまつて席を立ち、デスクを後にした。

—14日 午前10時48分 セイヴアール 繁華街49丁目
路地裏

初動捜査隊の貼ったテープをくぐり、急ごしらえの現場保護用テントに足を踏み入れる。

死体保護用のブルーシートに、コンクリートの上に滲んだ黒いシミ。証拠物件があったのだろう番号付きの札が点々と置かれているのが目に入る。

途端に鼻孔を突く血と死臭の臭気が漂い、鬱屈とした気分が小さく顔を覗かせた。

アベルトのキャリアは着任から現在までの期間から見ても、ベテランには程遠い。しかし第一線で活動する身として、それなりに場数を踏んでいると自覚していた。

それでも、もう二度と動かない人間の姿と、血だまりに浮かぶ亡骸から薄らと漂う言いようのない臭気だけは、どうしても慣れなかった。死体を見る度に、初めてその落ち窪んだ瞳で見つめられた時の事を思い返す。その真つ暗な瞳孔は、誰かの顔を覗き込むのと同時に、誰かに覗き込まれる時を待っている。それを理解していても、彼には、その光を失った瞳に、いと深き谷底で叫び声がこだまする地獄が垣間見えて仕方が無かった。

こういう時、アルカ達のような調停召喚士の職務を羨ましく思ってしまう。確かに彼女達の職務でも、人間の悪意や、頭の内側に潜んで、ふとした時に顔を覗かせる恐ろしい悪魔を見つめねばならない時が少なからずあるだろう。しかし、誰かの家族だったのだろうか惨い亡骸を

扱う事はまず職務上有り得ない。

アベルトは頭を振った。迷いを持っては心が揺らぐ、揺らぎがあれば捜査は出来ずと言っていた教官を思い出す。今此処に立っているのはこの亡骸の為なのだ。自分の為に悩んでどうする。

「よう、坊ちゃん。早い到着だな」

相棒のドランが、からかう様な軽い口調で言った。

この剽軽で何処か達観した中年の警察騎士は、アベルトの知る中でベテランの部類に入る捜査官だ。この男は事務作業中だろうと事件発生の通達にいち早く駆け付けているのか、必ず初動捜査隊に混じって現場に居る。

アベルトはフツと溜息を吐き、苦笑してひらひらと手を振った。

「皮肉かよ、アンタの方が先に着いてたつてのに。」

……で、何があつたんだ？」

「おう、一時間半前に裸の男が路地裏に倒れてるって通報があつてな。付近を巡回中だった警官二人が駆け付けて見付けたのが……この少年だ」

ドランがシートに歩み寄って屈み、端を掴んで持ち上げる。

中から姿を現したのは、身長170cm頬の、痩せた青白い肌をした少年だった。やや細い体格や幼さの残る顔立ちからして16、7歳程だろうか。上半身を薄汚れたダストボックスにもたれさせ、項垂れた顔だけが横を向いている。見開かれた黒い穴の様な瞳が、自分の血が流れた地面を見つめていた。血の線は当てもなくコンクリートの表面の傷を走ると、幾許かのところで掠れた痕と共にぴたりと止まっている

取っ組み合いをしたのか、血濡れのパーカーには幾つかの大きな皺とほころんだ傷、そして足跡があつた。この材質では、指紋を採るのに時間がかかるだろう。

思わず同期達の顔を重ねそうになったアベルトは、軽く息を吐いて死体の観察に戻る。

パーカーに滲んでいる血液の染みを見る。血は少年の額と後頭部の傷口から流れ出たらしく、薄汚れたダストボックスはべったりと赤

色に濡れていた。口の端からは切ったような痕と大きな痣が幾つかあり、鼻は右向きに折れている。

「ひどいな」

アベルトが顔を顰めて微かに目を背ける。

「路地裏はいつもこうだ。被害者はアレックス・マーヴィン、17歳。高校二年生。

此処から12ブロック先の第六高校に通ってた。今のところ逮捕歴や補導歴は無い。

自宅も近所にあるらしいから、此処は通学路の近くかもしれない」「名門校だな。学生証を持ってたのか」

「いいや、無い。だが第一発見者のパイナって女性が顔を見て気づいたんだ。

それで通報を。彼女の勤務する果物店も此処から2ブロック先にあるらしくてな。

近所の高校生はその店によく買い物に来るから、顔を覚えてたらしい」

「彼女なら知ってる。果物屋の娘さんだ。シヨックを？」

「まだ若いし、顔見知りの客の死体を見たんだ。無理もねえよ」

アベルトは溜息を吐いて現場を見回した。隣接する建物の雨乞いが壊れているのか、路地裏はそこから中水たまりだらけだった。おまけに、回収されていない生ゴミの山から汚物と油が染み出て、水面は濁った暗い虹色に変色していた。

その為か目立つ証拠物件しか見つけられず、プレートの数も少ない。

「親御さんに説明する、となると気が重くなるな」

「俺も長年この仕事やってるが、これには慣れんよ。」

マーヴィンには搜索願が出てる。昨夜自宅付近の交番が受理してた」

「家に帰らなかったのか」

「ああ。先週弟が高校に合格。昨夜はそのパーティをする筈だったらしい。」

だが昼に帰宅するはずが、翌日になっても彼は――」
「帰ってこなかった。俺も小さい頃家に帰らなかった事はあるが、永遠じゃない」

「検視官によりやあ、死亡推定時刻はおよそ十一時間前だ」
「となると、昨日の23時か。水たまりがあるな……昨日は晴れだった」

「一昨日のかもな。一応気象観測局にも問い合わせとくか。

今のところ、死因は後頭部の傷だ。検死解剖の予定は三十分後になるだろうな」

「足跡も期待できそうにないぞ。壁や粗大ごみの指紋が頼りか」

ドラムが遺体の後頭部を探り、傷口を見る。黒い髪の毛が楕円状に赤黒く染まっており、出血箇所だろう中心は肉がはみ出ていた。しかしよく見ると、傷口は斜め上にかかっている、数センチ程の細い一本の線になっており、ほの暗いその隙間から何かが此方を覗いている様な気がした。

「深そうだな。ひっかき傷に見える」

「細い金具が刺さって引き裂いた痕だ。」

この先を歩いて行った奥の方のダストボックスの角の金具が緩んでな。

紐状になった部分が飛び出してた。路地から血液反応も出たよ」

「凄いな。アンタが見つけたのか」

「いんや、一番最初に現場に到着した……なんてったかな。」

特別捜査官のリゼルってのがあつという間に見つけたんだ。

「そーいやその男、それからすぐこの辺りを一回りしてどっか行っちゃった」

アベルトの片眉がピクリと上がる。そのリゼルという男には、先日の強盗事件も含めて事情聴取せねばならない点が多くあつたが、如何せん情報が全くつかめなかったのだ。上司のジェイコブズに逮捕時の過剰暴行の容疑がかけられていると書面で連絡しても、一切返事は帰ってこない。

しかしその人物が、現場で平然と捜査を行っているとは、予想だに

しなかった事実だ。アベルトはこの不可思議な状況について考えれば、集中力が途切れてしまうと感じ、頭の片隅に澁々と考察を引つ込めた。

「知り合いか？」

「後で話すよ」

「そうかい。最近は殺人現場に客がよく来るな。」

「ついさっきもお前と入れ違いで、地域の犯罪撲滅委員会の会長が来たんだ」

「誓央連合が自治団体に指定したやつか？ まさか口出ししてきたのかよ」

「ああ。奴さん、来週犯罪発生率を防ぐだのどうたらんの演説があるみたいでな。」

今犯罪が起きるとまずいだのなんだのまくし立ててたよ」

よく口が回るもんだな、とドランがぼやきながら被害者の顔や上半身を左右に反らし、顔の状態を確認する。

「口が回るって言やあ、この被害者は口も利けないほど殴られたらしい。」

「見ろ、唇がひどく腫れ上がってる。喉もだ」

「頬や額の痣もひどい。右目は少し潰れてるな……踏まれもした筈だ。」

手に防御創があるから、上半身の殴打痕は生前に出来たものが多い筈だ」

「ああ。それともう一つ」

ドランは言うなり死体の袖を捲り、右肘の内側が見える様に出した。

肘の内側の皮膚には、幾つかの小さな点状の傷が、薄い発疹の様に散らばっていた。

「注射痕か。それも静脈用の針の」

「に、見えるってだけさ。とりあえず血液サンプルを鑑識課に回しといたよ」

「殴られたのは薬物の取り合いか？ 名門高校の学生が、とは思えな

いがな。

俺は裁判所に封印記録の問い合わせをしとく」

どちらにせよ親には伝えにくいが、と付け加えて、アベルトは周囲を見渡し、ドラム共に奥の方へと向かう。振り返ると、死体遺棄現場から表まで約9、10メートル程ある様に見えた。その上街灯も無い為、夜はかなり暗かった筈だ。左右の建物は改装中の税理士事務所と空き家で、住民はいない。

更に奥へと路地を歩いていく。死体が引きずられた痕だろう微量な血痕の脇に、プレートが並んで立っている。水たまりの濁った水面に、パーカーの色と同じ毛が浮いていた。

路地裏の奥は更に掃き溜めじみていた。不法投棄された、錆びと油を垂れ流すガラクタや家具だった物が路地の両脇を尽く埋めており、その奥にもう何か月も使われていないだろうダストボックスが転がっていた。尤も、その向こう側の通りも、人気がまるで感じられなかったが。

アベルトがボックスの脇に屈むと、丁度人が長座姿勢になった時の頭の位置に、ボックスの角にピンと立った金具が突き出ているのが見える。箱の蓋と胴体に僅かに、蓋が開いている小さな隙間の中には幾許かの、血の飛沫が広がっていた。金具は酸化した血と膿の様な脳の破片にまみれて、異臭を放っていた。

「しかし、此処で殺してわざわざ表側の方に引きずったのは何故だろう？

此処に捨てるときや、いずれネズミかなにかが持つてくだろうに。目撃者は？」

「今、巡回中の騎士が総手で警戒網と聞き込みを張ってるが、まだ見つかってない。

となりの事務所の業者も、昨日と一昨日は別の作業で来ていないそうだ」

「裏側の通りはドヤ街だし、正規の目撃者を探すのは難しいな」

となると、最初の頼りは第一発見者の証言か。そう付け加えると、アベルトはドラムと共に表のテントへ向かった。しかしアベルトの

後ろ髪を引くように、彼の鼻孔の下には血と屍の臭気が残っていた。

「お店の買い出しに行ってたんです。ウチは喫茶も軽く営んでいるので……」

「ええ、繁華街の方のお店ですね。俺の同期もよく通ってますよ」

果物屋の女性店員は、おどおどとした態度で言葉尻を小さくして話し始めた。

普段店の呼び込みをしているときの、あの明るく澆刺とした様子をよく見かけるアベルトは、内心の毒だと感じていた。陰鬱な表情になるのを咄嗟に隠し、アベルトは出来るだけ穏やかな調子で話を進める様に促す。

「それで……少しお辛いとは思いますが、遺体を見つけた経緯と、遺体の身元について知っていることを話してください。勿論、ゆつくりで構いませんよ」

「はい。ええ、と……それで、店に戻ろうとして、近道でこっちの道に入ったんです。

そしたら、急に変な臭いがして。でもお店とかからじゃなくて、裏路地の方から」

「それで、異臭の元を見に行った？」

「はい。そうしたら、男の子が血まみれで倒れてて。

慌てて交番に通報したんです。見知った子だったから」

その時の光景を思い出したのか、彼女が口に軽く手を宛がったので、アベルトは救急士からタオルを受け取って彼女に手渡した。ドラッグが無理のないように促すと、彼女は一、二拍置いて大丈夫と言った。「見知った子、というのはアレックス・マーヴィン君ですね。

彼と以前に話したことが？」

「はい、何度か店で買い物をしてくれた時に。

ちよつと内気な子で、でも優しくして礼儀正しい子でした。

「名門大学の受験勉強をしていたみたいで……」

ドラッグがアベルトに目配りをする。彼の親と教師に聞き込みが必要になった事をメモして、アベルトは先を促した。

「彼と最後にあつたのはいつ頃ですか」

「三日前です。夕方に帰宅するついでにウチで買い物をしてたみたいで」

「先程マーヴィン君は内気気味と仰ったが、彼と親しい友人などはいましたか？」

「いえ、あまり……あ、でも、ジョツシユという子が居ました。

彼と同級生で、幼馴染の仲良しだといつも言っていたんです。

マーヴィン君も彼と笑ってよく話してました。真面目そうな子でしたよ」

「成程。その子の本名はわかりますか？」

「確か……ジョシユ・アークランドだったと思います」

二人はパイナに礼を言つて、騎士団員のテントを出た。テープの外では新聞社の記者がたむろしており、暇さえあればレンズを向けてシャッターを切っている者も居る。そんなに死体をカメラに収めたけりや、鑑識に勤めればいいのに。アベルトは、目障りなストロボを焚くカメラマンの無作法な撮影姿勢を見て、つい思ってしまった。

「ジョシユ・アークランドか。本部に問い合わせよう」

ドランはそう言つて手帳を開けると情報を確認しつつ、胸元の無線機の周波数を本部無線係のものに合わせた。

「こちらドラン。騎士団番号117845。刑事課分析官のロニーに繋いでくれ」

『少々お待ちください。ただ今連絡します』

それから一つ間を置いて独特のノイズが入り、凜とした女性分析官の声が無線機から流れた。

『お呼びですか』

「よう、ロニー。これから言う人物の検索を頼む。

名前はジョシユ・アークランド。男性、年齢は16か17だ。

西区の第六高校の二年生。補導記録でもなんでも洗ってくれ」

『少しお待ちを……出ました。』

ジョシユ・アークランド。補導記録はありません。ですが一つ、交通課に記録が』

「何だ？」

『昨夜の23時43分に死亡が確認されています。死因は列車との衝突による轢死。』

記録によれば、深夜帯に稼働する貨物運搬用鉄道の7番線路に侵入した、と。

身元の確認は今朝両親が行った模様です』

「事故が起きた場所は？」

『繁華街47丁目の線路沿いです。交通課と鉄道警察所属の警官が現場対応を』

「ありがとう。良い一日を。」

……だとよ、とりあえずそっちの事故は鉄道警察をあたるか」

「47丁目の線路っていうと、こっから繁華街中央に繋がるあの薄暗い場所だな。」

しかしいったいどういう訳だ？ 偶然にしては縁起悪いぜ」

アベルトがドラムと共に報道陣に見つからないようにテープをくぐり、訊く。

外の繁華街の通りは野次馬が減り、路地裏に少年の死体がある事など知らぬ様に活気づき始めていた。

「わからんよ、俺もさっぱりだ。」

確かなのは、二人の子供が同じ夜に奇妙な死に方をしたって事さ」

― 捜査手記 14日 午後1時48分

96丁目の路地裏で、ホームレスの男が大声で喚いていた。

こんな狂った世の中はもうすぐ終わる、きつとりベラルが世の破滅を認めるんだと。

この街の住民は、自分が住む場所の素顔をよく知っている。だが、もたらされた虚の生活に甘える為に、誰も真実を見ようとはしない。毛嫌いし遠ざけるポーズを見せても、結局その汚泥にまみれた素顔は鏡に映った自分の顔に似てきているのに。誰もが全てに見て見ぬふりをしている。誰もが……

結論から言えば、アレックス・マーヴィンが薬を肘の内側に目一杯打ち込んで、路地裏で吐しゃ物と糞をまき散らした事実は無かった。少なくとも、不法投棄された腐りかけの木棚の上で眠るまでは。

アレックス・マーヴィンの自宅や学校付近で薬物を売る5人の売人の鼻と歯を折ったが、成果は無かった。誰も死体の生前の顔を見ていない。そもそもあのクズ共は、注射型の薬は販売していなかった。精々がキセルの口に詰め込む密造大麻程度だ。

それに、あの注射痕は数だけ見れば二か月前まで遡って薬をやっていた事になるが、実際に二か月麻薬を服用し続けて名門大学目標の成績を保てる訳がない。生徒と性交した可能性のある教師を数人脅して話を聞いたが、麻薬を服用した様子は無いと全員が言っている。

だが犯人らしき人間を一人見かけたという情報を近隣住人から得た。地元の麻薬密売を食い物にしているカローナ・ファミリーの若頭を名乗った男だ。アルマンド・チェイス。浅黒い肌で黒髪、身長は180後半。尤も、情報提供者は、泣いている赤ん坊を殴っていた男だ。左右の鎖骨を折って歯を数本引き抜いておいたが、あれはジャンキーに違いない。あまり信用は出来ない。

あの注射痕はやはり偽装だ。痣と血のせいで古傷に見えるだけで、実際には何者かが死体をジャンキーのなれの果てに仕立て上げたかったらしい。傷の程度も、深さは異なったがすべて同じ時期のものだ。ビニル臭いコンドームの様に真新しかった。

実行犯が死体の素性を知らなかったと考えよう。そうでなければ薬物常用者に見せかける事は無い。死体の身元を隠すには、服を剥いで顔と歯と手を潰し、燃やすか埋めるかが一番安全だというのに、この犯人は敢えて偽装を選んだ。

時間が無かったからだ。事前に計画を立てたなら、標的の素性を少なからず知っている筈だ。しかしそれを無視して死体に工作をしたという事は、素性を知らずに突発的な殺害に至ったという訳だ。もしくは殺す意図は無かったのかもしれない。どちらにせよクズに変わりはないが。

死体は中背で痩せぎすだ。不意を打てば簡単に殺せるだろう。だ

が傷は一つではなく、腹や背中、腕や顔に集中している。後頭部には死因となった傷だけ……

パーカーについていた足跡はいくつか種類があった。つまり死体は生前、数人にリンチされたのだ。防御創が腕にあったのは蹴りや拳を防いだからだ。その時に倒され、箱の角に頭を打った。

だが麻薬漬けのゴミの頭に、注射針で偽装するだけの中身があるのか？ 手引きした人間が居る筈だ。

あの辺りは夜になれば売女共やジャンキーのたまり場が変わる。薬物常用者らしき男を捨てるには絶好の場所だ。それを熟知していた者が現場に居た。

まずはアルマンド・チェイスからだ。奴は郊外のグロリアズ・バーに入り浸る事が多い。そこを攻めるとしよう。

分厚い手帳を閉じてコートの懐にしまい込み、路地裏の奥へと歩いていく。リゼルは、昨夜のホームレスの焚き火がごく僅かにオレンジ色に照らし出した行き止まりを見つめていた。丈の長い木の柵の手前で、体格の良い三人の男達が、一人の女を取り囲んでいるのが見える。

―手前の男はひったくりだ。12丁目の交差点で中年の女の鞆を盗んだ。残りの二人は強盗犯だ。一週間前、4丁目の合法マリファナ店を襲った。重傷者2名。片方は刃物、片方は特殊警棒だ。今も持っている。どちらにせよ結果は変わらないが。

「おいオッサン！ ラリってんのか？ ここはインポの来る場所じゃねーぞ！」

ゆっくりと歩み寄ってくるリゼルに気付き、手前の男が片手を前に出してからかう様な調子で静止する。

そして、男が逆にリゼルに歩み寄り、その肩を右手で押そうとした瞬間だった。リゼルが男の腕を引き、その人差し指を素早く握って手の甲目掛けてへし折った。男が悲鳴をあげるよりも早く、彼の股間にリゼルの恐ろしい速さの蹴りが叩きこまれる。固いブーツの爪先が男の性器を潰し、鈍く激しい激痛と吐き気が男を襲った。

前のめりになった男の膝の裏を蹴って逸らし、髪の毛を掴んで男の顔を煉瓦模様の壁に勢い良く叩きつける。そしてその後頭部に片膝の一撃を叩きこみ、重く固い音が響いた。

男が呻き声を上げて倒れながら、口から歯の欠片を幾つか吐き出した。それと同時に、残りの二人がリゼルに気付いて走り寄りながら、各々の武器を取り出した。

リゼルは、まず襲い掛かってきた男の警棒を素早く躲して右に回り込む。そのままリアットの様に二人目の首に腕をたたき込み、胸倉をつかんだ。そしてそのまま粗大ゴミの山にあった、倒れたテーブルの縁に男の背中を叩きつけた。

細いアルミ製の縁に男の背骨と肋骨が殴り付けられ、息が出来ずに警棒を取り落としながら二人目が声の無い悲鳴を上げた。立て続けに片目へ肘の一撃を入れ、興奮で理性が途切れた、最後の一人のナイフをいなす。前進すると同時に片手でナイフを握る手首を叩きながら、リゼルは片肘を男の喉に打ちこんだ。

腰の回転により勢いが付き、凄まじい威力を持つ肘が男の喉仏を叩き潰す。リゼルは瞬時にナイフを奪い取り、男の目元を斬り付けて、前のめりになったその顔に凄まじい力で拳を喰らわせた。

先程背中をやられた二人目が呻き声をあげながらリゼルに背後から襲いかかるが、それより遥かに俊敏な動きでリゼルが左に回り込み、膝の裏を蹴る。そして中腰の様な姿勢になった男を髪の毛を引っ張って引き寄せ、リゼルは、先程奪ったナイフを男の口に突き刺した。くぐもった悲鳴が上がると同時に、リゼルは凄まじい力でナイフを横に薙いだ。血飛沫が飛び散り、悲鳴が一段と高くなった。しかし男が力を込め、リゼルのコートの袖を掴んで必死の抵抗を見せる。だがそれよりも早く、リゼルが刺したままのナイフの柄から手を離して男の手を掴み、痛みで曲がりきらなかったのだらう小指と薬指を真逆の方向にへし折った。

男が倒れてから、悲鳴が掠れた小さな声に変わったのは、それから間もなくであった。

リゼルは突き当りの柵を見た。鞆を抱えた女がへたり込んでいる。

露出の多い服を、着替えが無いという様に不格好なコートで覆っている。近所の人間ならば、女が娼婦だという事に何となく気が付くだろう。

鞆を抱えて座っていたが、最後の一人が虫の息になったのを見て媚び諂うような視線をリゼルに向けていた。

リゼルは女の横にあるゴミ山に歩み寄った。それに合わせて、少し震える足取りで近づいた。

「ねえ、助けてくれてありがとう。」

アンタならタダでサービスしてあげるよ、どう?。」

リゼルは女の媚びた態度を無視してゴミ山を見つめた後、しばらくしてから女の方へゆっくりと振り向いた。

「郊外34丁目の強盗」

「え?。」

聞き返すと同時に、女の顔色が変わった。微かに後退りする音が壁に響く。

「性感染症検査を知人に受けさせて性病を隠して売春。」

そして通行人を誘って暴行と窃盗を働いたな」

女が護身用のスプレーを取り出すよりも速く、リゼルがゴミ山から拾い上げた酒瓶が女の頭蓋を殴りつけた。そして女が倒れると同時に、割れた酒瓶を女の顔に叩きつけ、スプレーを握ったまままっすぐに伸びきった彼女の腕を掴み、その肘に膝の一撃を叩き込んで折る。ガラス片が女の顔の周囲にまんべんなく散乱し、リゼルが女の髪を掴んで持ち上げ、その破片まみれの地に叩きつけた。

—この女は、一週間指名手配されていた売女だ。性感染症検査を誤魔化して性病を持ったまま売春を行っている。四日前に郊外34丁目の路地裏で通行人の男を殴って、財布と荷物を盗んでいる。これで四人の犯罪者を始末した。情報を手帳に書いておかなければ。

そう思いながら、低い呻き声を白痴の様に上げて微動だにしない女を放置し、表の通りへと向かう。

表はいつも通りの活気に溢れていた。皆が笑顔を交わしている。

しかし誰も路地裏の事には見向きもしていなかった。そう、誰も

……。

素顔で語るとき人は最も本音から遠ざかるが、仮面を与えれば真実を語り出す。

―オスカー・ワイルド